

四つの危機（カタストロフ）の時代・ 四つの問題群の不連続な継承としての、近代建築史 — Plate Tectonics History

日本近代建築史 — 1914年–2013年の百年を連続的な流れではなく、四つのカタストロフの時代、
— | **1923** (–37)、二 | **1945** (–57)、三 | **1968** (–83)、四 | **1989–2001** (1995–2011)
に発現した問題群（とそれへの応答としての建築作品および議論）とその不連続な継承として、四つの独立したプレートとして展示構成し、提示する。

四つの問題群（四つの危機の時代）としてのプレート

モダニズム成立の一つの条件は、先行する特定のコンテクスト（歴史、場所）からの切断にある。
一方で建築は、既存のドメスティックな生産技術と組織原理（規範）と適応することなしに建設されえないし機能することもない。
それゆえに建築の根拠が徹底して考察されうる時代（モダニズムが徹底して思考された時代）は、常に、こうした建築が生産され
受容される社会基盤=生産過程、使用過程が揺らぎ（危機に瀕し）、その基盤への疑いが顕在化された時代でもあった。

この展示企画の基本コンセプトは、
日本の近代建築史を連続的な過程として描くのではなく、歴史的な変動を構造づけることになった、むしろ歴史的連続を断絶
する危機的な時代を抽出し、それらを相互に切断された問題群のプレートとして提示することにある。
（この展示によって、一見、特異な時代として孤立してみえた、これらの時代に胚胎された問題群が、時間差をもって反復され、継承され展開され
ていく過程が浮かび上がるだろう）。

建築という方法の中核はこうした危機の時代にこそ構築される。（この時期に発表された作品群は、この問題枠を的確に抽出し、問題
提起的な意味で大きな影響力をもちつづける）。

が一方で、いわゆる建築史の展開はここで胚胎された方法が援用され技術的に洗練され、生産組織にフィードバックされる
ことで、それに順応し制度化され洗練（強化）されていく過程だったともいえよう。連続的展開に捉えられるのは、むしろ順応（受
け入れ）の過程である。（その意味で、いままで多く海外に紹介されてきたのは、この成熟期、洗練期の作品であったことも否めない。危機の
時代を体現する問題提起的な影響力をもつ作品群は、特異的すぎ、海外に紹介されにくかったという経緯があった）。

が、歴史的展開の本当の動因を捉えようとするのであれば、むしろ散発的、不連続に出現するように見える特異な時代に焦
点を合わせ、ここに存在した、その後の建築の歴史を貫き構造化することになる、根底的な問いを読み取る必要がある。こ
の展示提案では、日本近代史に突出する4つの危機の時代（カタストロフ、パラダイム変動期）に焦点を合わせ、その時期に生産
された代表的かつ後世まで問題提起的なインパクトをもちつづける作品（群）にターゲットを合わせ、（その作品の物質的存在とし
てのインパクト、その構成原理、歴史的背景、他作品との関連、展開など）を立体的に解析、展示することで、歴史のなかに孤島のように
不連続に突出してあらわれる特異な時代の問題群が、むしろ歴史を形成するマトリックスとして通底、連動していたことを提
示する。

展示の方針

1

吉阪隆正の「不連続統一体」の思想を体現する、日本館の構造に応答する展示。
吉阪隆正設計による日本館の特色は4つの構造柱によって支えられたピロティ構造にある。展示室内を貫く、4本の柱の位置の異例さに示されているように、それぞれの柱はキャンティによって一枚のスラブ（床）を支え、それぞれ独立した四つの構造体のプレートが 卍形に相互に支えあって一つの空間を形成している。床の中央の穴は床に開けられたのではなく、4つのプレートが寄り合わさったときの空白、余白なのである。（のちのリチャード・セラの作品を想起させる）。
展示計画はこの不連続統一体の構造を最大限生かし（それ自体を展示対象としつつ）、四つの時代をそれぞれのプレートに対応させる。

2

それぞれの時代の展示物は、以下で構成される。

1. それぞれの時代の代表的な建築物（計画案を含む）を、2-3 選択、それぞれ高精度の模型（2.5×2.0× 2.5 ㎝大程度以内）と、配管、金物、調度などの、部分実物、あるいは実物大部分再現模型を展示。
2. 図面などの補足資料。関連する他の建築物、作品などを補足展示。
3. 密接な関連性を有する、美術作品など他ジャンルの作品を可能、必要であれば展示。
4. 映像作家によって構成された、それぞれの時代の問題群を示す映像作品。（メタドキュメンタリー）。

-
- * 海外で紹介されることの少なかった、問題（群を体現する作品）としてインパクトを示しつつつけた作品を展示。
とくに後藤慶二、石本喜久治、白井晟一、吉阪隆正。
 - *文化状況全体との関連性を示すために、関連ある美術作品、舞台、文学作品などのも展示
 - *その時代の状況を適切、かつ今日的な問題として（アクチュアルな展示効果をもたせ）提示するために、それぞれのセクションを力量ある映像作家による映像作品を制作、展示。

展示内容（方針）

展示の詳細は建築史家、美術史家、建築家などで構成されたリサーチチーム（別紙）により厳密に検討され確定されることになるが、展示計画の各セクションの構成はおおよそ以下のように方向づけられている。

0 | 前提

Architecture という概念が導入されたとき、日本には、その概念に対応するところの高度な構築技術も、また洗練された生活文化もすでに存在していた。すなわち都市の生産基盤（インフラ）も生活基盤も高度に発達していた。日本における Architecture という概念の輸入は、むしろ日本に既にあった一切の基盤（生活とも機能とも）とも結びつかない、様式建築の導入においてこそ、本質的な問いかけを強いるものになったのである。

すなわち様式建築とは、既存の場、コンテクストから遊離したもの、距離をもたせるものとして現れた。したがって様式への批判は、同時に様式を受け入れる場＝共同体、既存制度への批判と同時に行われることにもなった。ゆえに日本において、モダニズムの問題設定はより深く切実に捉えられもしたのである（簡単に機能的必然に結びつけることができないゆえに）。問うことが要請されたのは、既存のコンテクストに依ることなく、建築を支える、思想的根拠だったということである。

（その意味で1915年に行われた、中村達太郎、山崎静太郎、後藤慶二によって交わされた『虚偽建築』論争のもつ意味は深い。後藤慶二の「虚偽のハガキ」論は同じく後藤慶二による豊多摩監獄（1915）と同じく、決定的である。展示はこの豊多摩監獄からはじめられる。後藤慶二の豊多摩監獄がすぐれて問題提起的でありつづけたのは、都市を決定するのは下部構造（インフラ）＝物理的構造というよりも機能的機構であり、それは同じく人間を規定するところの身体の下部構造—生理的機構＝器官と、連動することを捉えたことにあった。これが都市、そして身体の無意識（インフラ）である。このインフラ＝下部構造—物質的機能的機構）によって建築という上部構造は決定される）。

後藤慶二「豊多摩監獄」からはじめられる、日本近代建築史の問題群の推移は図 a のようにまとめられる。それぞれの項が示しているのは、建築を決定する、もっとも重要とみなされる論拠（目的）である。物質基盤の必然が建築形態を決定するのか。あるいは場所（国土・環境）の理か。それを使い、受け入れる民衆か、あるいは資本の利か。幾度かのカタストロフで、主要な決定因は→のように推移した。

正統史（国民建築の歴史）から外れていた建築思考を浮上させる。

1933 年は一つの転換点である。ナチス独裁政権の完成、またスターリン体制の徹底。日本は 32 年の満州国建国につづいて国際連盟からの脱退。1930 年代に、各国の国民文化の形態は急激に統合される。日本においても国民建築様式、国民芸術様式の形態がまとまって現れるようになる。ここでのキーワードは、国土であり、風土そして環境であった。1937 年の坂倉準三のバリ万博日本館から、丹下の大東亜記念建設コンペ、広島平和記念公園、東京計画、メタボリズムを経由して、いわゆる国民建築の歴史の正統史は 1933 年を起点として新全国総合計画が中座する 70 年代中期まで持続すると見ることができる。**図 a では 1933 年からはじまる黒線で表現。**

以上のような正統史（海外に紹介されてきた作品の多くは、このラインに沿い、またその延長で語られるものであった）を参照軸に（会場中央の開口周囲に提示）、いままでは、その正統史に対して、不連続に生起する亀裂（カタストロフ）のように扱われてきた、**建築の根拠を問う思考＝1923、1945、1968（72、1995 年といった時代に現れ、のちの建築の論理を根底から支配することになった問題枠とその不連続な連続なラインを提示する（図 a では青字のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）。**

この展示で主にとりあげられる建築家は以下である。

後藤慶二、今和次郎、村山知義、石本喜久治、堀口捨己、山口文象、坂倉準三、丹下建三、谷口吉郎、白井晟一、吉阪隆正、渡辺洋二、磯崎新、藤井博己、原広司など、そのなかでも**後藤慶二、石本喜久治、白井晟一、吉阪隆正、**の仕事は大きく紹介されることになる。

展示の配置は、図 a で示されたような、問題枠の推移（**青線**）に対応している。

「監獄と新聞」
インフラ (下部構造=無意識) の噴出。

- ☆後藤慶二 | 豊多摩監獄 (1915) *模型展示予定
- ☆石本喜久治 | 東京朝日新聞本社 (1929) *模型展示予定

「寺院か 原子炉か」
国土の瓦解。民衆論 (伝統論争)

- ☆白井晟一 | 原爆堂 (1955) *模型展示予定
谷口吉郎 | 藤村記念館 (1947)
谷口吉郎 | 秩父セメント第 2 工場 (1955)
- ☆吉阪隆正 | ヴェニス・ビエンナーレ日本館 (1956) *模型展示予定
丹下健三 | 広島平和記念公園 (1952)
丹下健三 | 東京計画 1960 (1961)

「アジトあるいは constellation」
離散するモナド。あるいは不連続統一体
形式的完結=孤立 とネットワーク
都市計画の破綻。巨大建築論争。

- ☆吉阪隆正 | 大学セミナー・ハウス (1965-) *模型展示予定
- ☆白井晟一 | 親和銀行本店 (1967-) *模型展示予定
吉阪隆正 | 箱根国際観光センター 応募案 (1970)
渡辺洋治 | 第三スカイビル [軍艦マンション] (1970)
黒川紀章 | 中銀カプセルタワービル (1972)
原広司 | 栗津邸 (1972)
原広司 | 自邸 (1973)
藤井博己 | 宮島邸 (1973)
藤井博己 | 等々力邸 (1975)
磯崎新 | 群馬県立近代美術館 (1974)
磯崎新 | 北九州市立中央図書館 (1974)
象設計集団 | 今帰仁村中央公民館 (1977)
山本理顕 | 山川山荘 (1978)
磯崎新 | つくばセンタービル (1983)
原広司 | ヤマトインターナショナル (1987)

「NOWHERE ARCHITECT」
冷戦構造の終わり (戦後=昭和体制の終わり) から、911、311
場所の流出、消去される自己像。レーゾンデーテルの隠滅。
——逃避する建築。消去される自己像。アリバイ作り。

- 磯崎新 | 海市計画 (1997)
SANAA | 金沢 21 世紀美術館 (2004)
伊東豊雄 | せんだいメディアテーク (2001)
- 坂茂 | 水琴窟の東屋 (1989)
坂茂 | 紙のログハウス - 神戸 (1995)
灰塚アースワーク (1994-)
鈴木了二 | 物質試行 47 金刀比羅宮プロジェクト (2004)

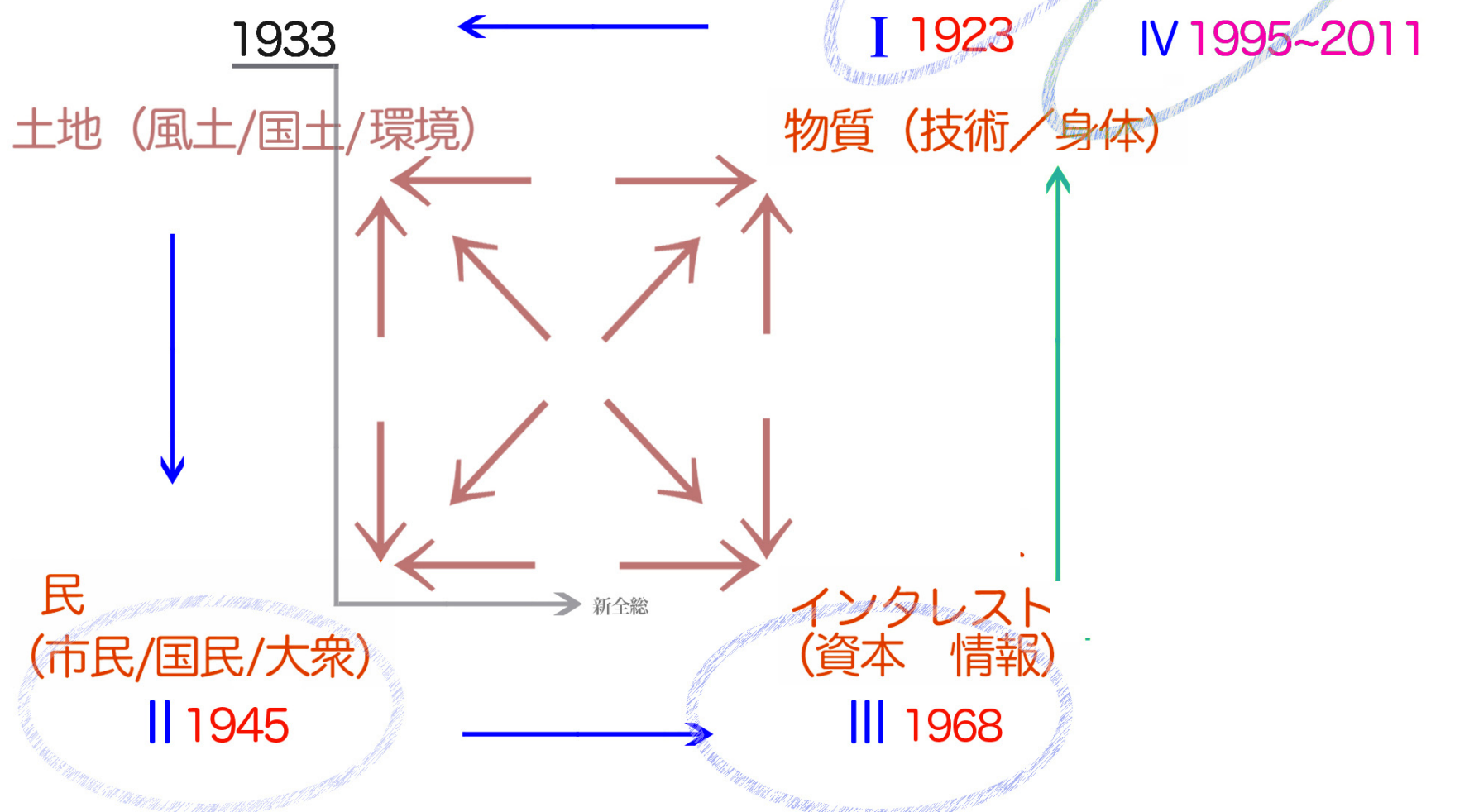
*** 無数の建築模型、建築プロジェクト模型が並べられた巨大な棚で展示
+映像作品にようる展示**

建築を決定するのは何か？

日本近代建築史の問題群の推移

・1933以降に日本の近代建築様式(新日本様式) はほぼ固まる、戦争期を経てその展開は正史として1973年まで持続する。
(坂倉準三のパリ万国博、日本館を嚆矢とみることができる)

・今回の展示では、この いわゆる正史をガイドラインにし、それに対する違和作用のように断続的に現れた、根底的(ラジカル)な建築思考の流れを紹介する(青線部分)
不連続に現れる通奏低音。
日本における近代建築(モダニズム)の核心はこの流れにあると確信するからである。

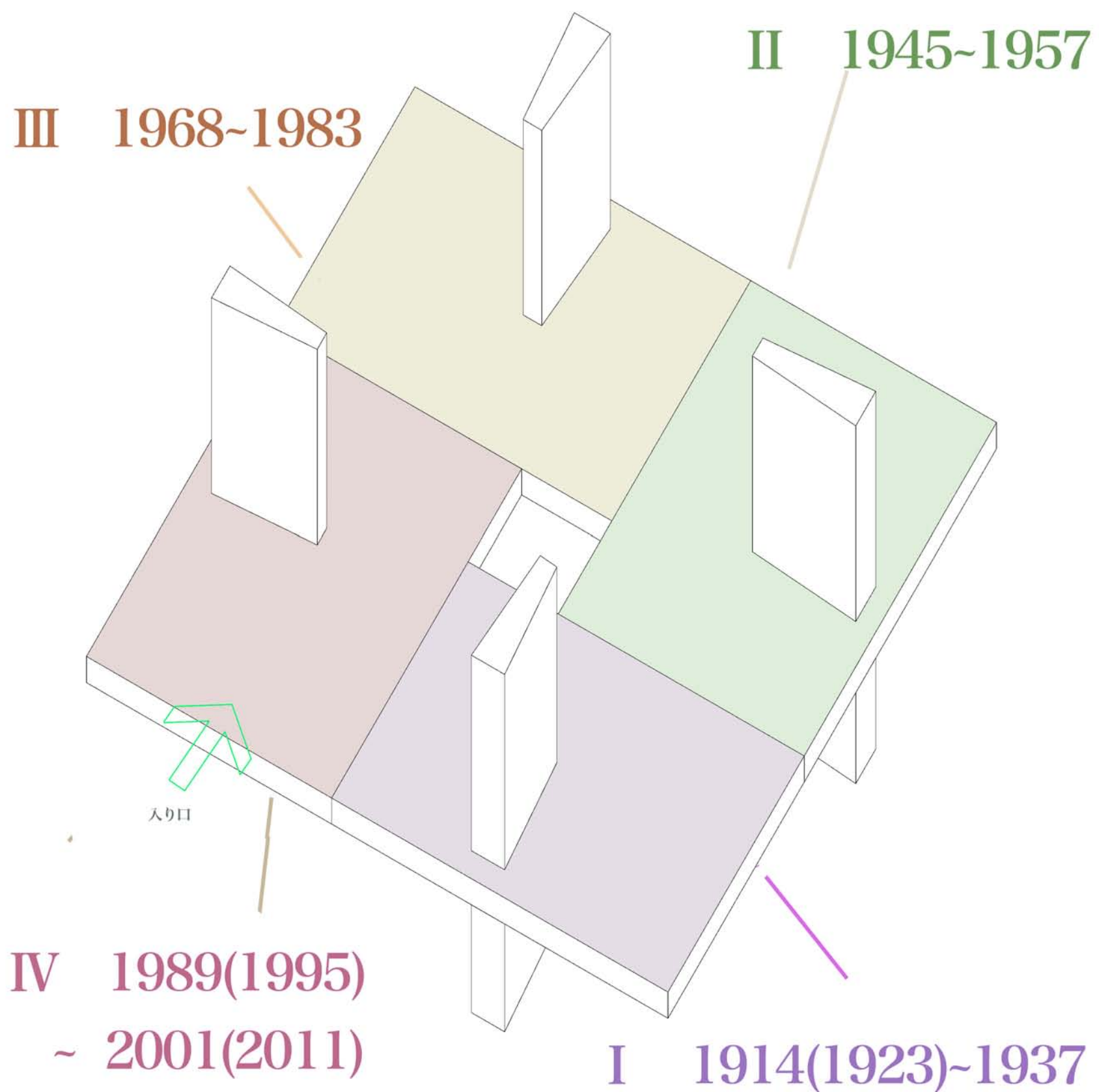


a

日本近代建築史の問題群の推移は(図 a)のようにまとめられる。それぞれの項が示しているのは、建築を決定する、もっとも重要とみなされる論拠(目的)である。物質基盤の必然が建築形態を決定するのか。あるいは場所(国土。環境)の理か。それを使い、受け入れる民衆か、あるいは、資本の利か、情報価値か。幾度かのカタストロフで、主要な決定因は青い→のように推移する。1923,1933,1945,1968, ついで 1989 欧米(1995 日本)~2001 欧米(2011 日本)、はそれぞれの問題群の変動に決定的な影響を与えた事件、カタストロフの発生した年代である。

展示の配置(図 b)は、この推移に対応している、が、ただし 1933(ナショナリズムへの傾斜)は、1923、と 1945 の文脈内に含んで展示。代わって、会場入り口と出口にあたる、IV のプレートに、1989 欧米(1995 日本)~2001 欧米(2011 日本)を展示する。(欧米で生じた政治的カタストロフが自然災害に代替されるのは、第一大戦の代理カタストロフとして関東大震災が捉えられたことと似ている)。

吉阪隆正による日本館構造（4つの独立したスラブによる不連続統一体）に対応させ、
歴史を四つの不連続なプレートとして提示



b



I 1914(1923)~1937 第一世界大戦
監獄 と 新聞
・ インフラ（下部構造＝無意識）の噴出

- 関東大震災
- 分離派
- 新感覚派
- マヴォ
- 今和次郎
- フロイト全集
- 文芸戦線
- 文芸時代
- 狂った一頁

石本喜久治 東京朝日新聞社 1929_



石本喜久治_三宅邸 1929_

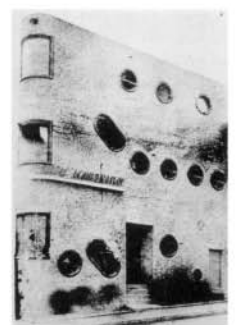
後藤慶二 豊多摩監獄 1915_



●中央は管理棟 奥に監舎が見える



村山知義 コンストルクチオン 1925



村山知義 吉行美容院 1924_

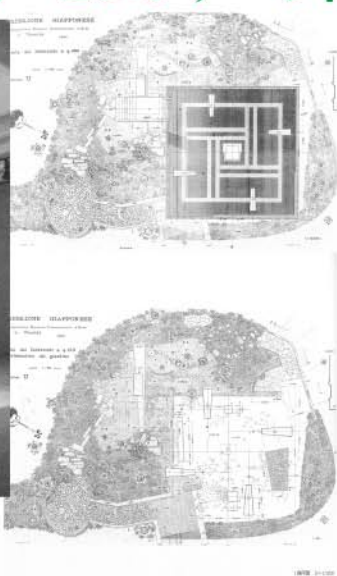
II 1945~1957 第二次世界大戦終結（敗戦）

寺院か、原子炉か。
国土の瓦解。民衆論（伝統論争）

岡本太郎
武谷三男
丸山真男
イサムノグチ
石原吉郎
浜田知明
山下菊二
花田清輝
安部公房
坂口安吾
土門拳
第五福竜丸
砂川闘争
朝鮮戦争

吉阪隆正

ヴェニス・ビエンナーレ日本館 1956



丹下健三 広島平和記念公園



1933年パラダイム（国土＝環境論）の流れはメタボリズムへ連続, 1968新全総まで持続する
1930年中期（坂倉準三、パリ万博日本館が代表）に形をみる新日本様式（国民建築様式）の流れ
は日本建築史の主流として70年代以降まで持続。

白井晟一 原爆堂計画 1955
「TEMPLE ATOMIC CATASTOPHS」



坂倉準三 神奈川県立近代美術館 1951

谷口吉郎 秩父セメント第2工場 1955



III 1968~1983

五月革命～オイルショック（成長の限界）

都市計画の破綻。巨大建築論争

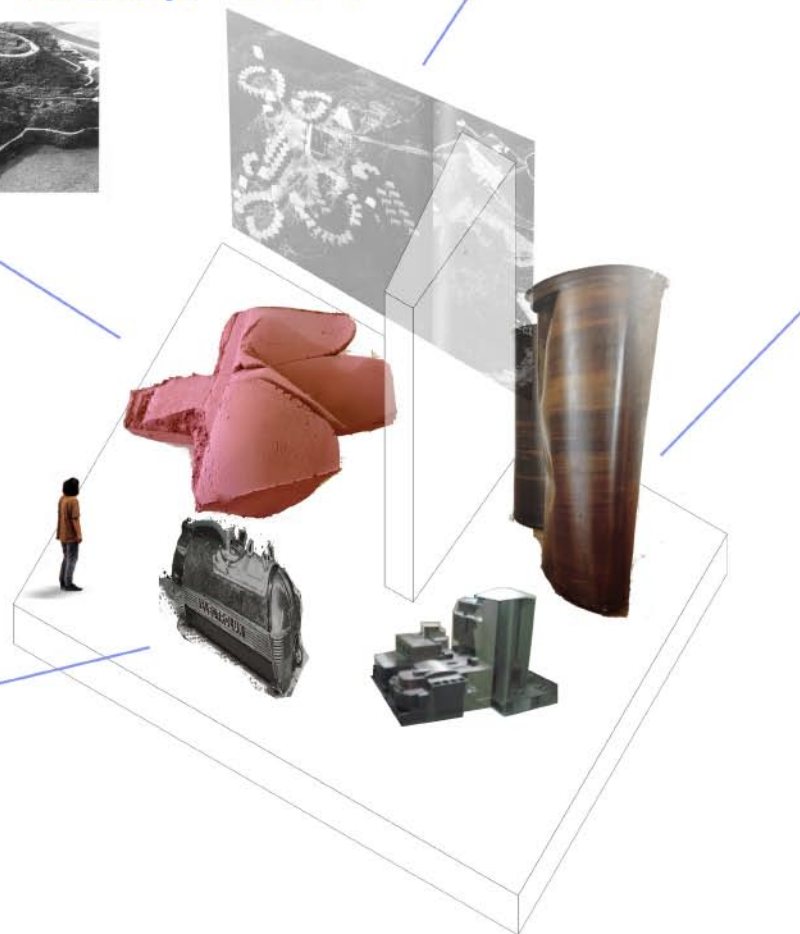
アジトあるいは constellation

離散するモノド。あるいは不連続統一体～離散的集合
形式的完結＝孤立 と ネットワーク

吉阪隆正 箱根国際観光センター応募案 1970



原広司
栗津潔邸 1972
自邸 1973



吉阪隆正

大学セミナー・ハウス 1965～



白井晟一 親和銀行本店 1967~77



渡辺洋治 第3スカイビル軍艦マンション 1970



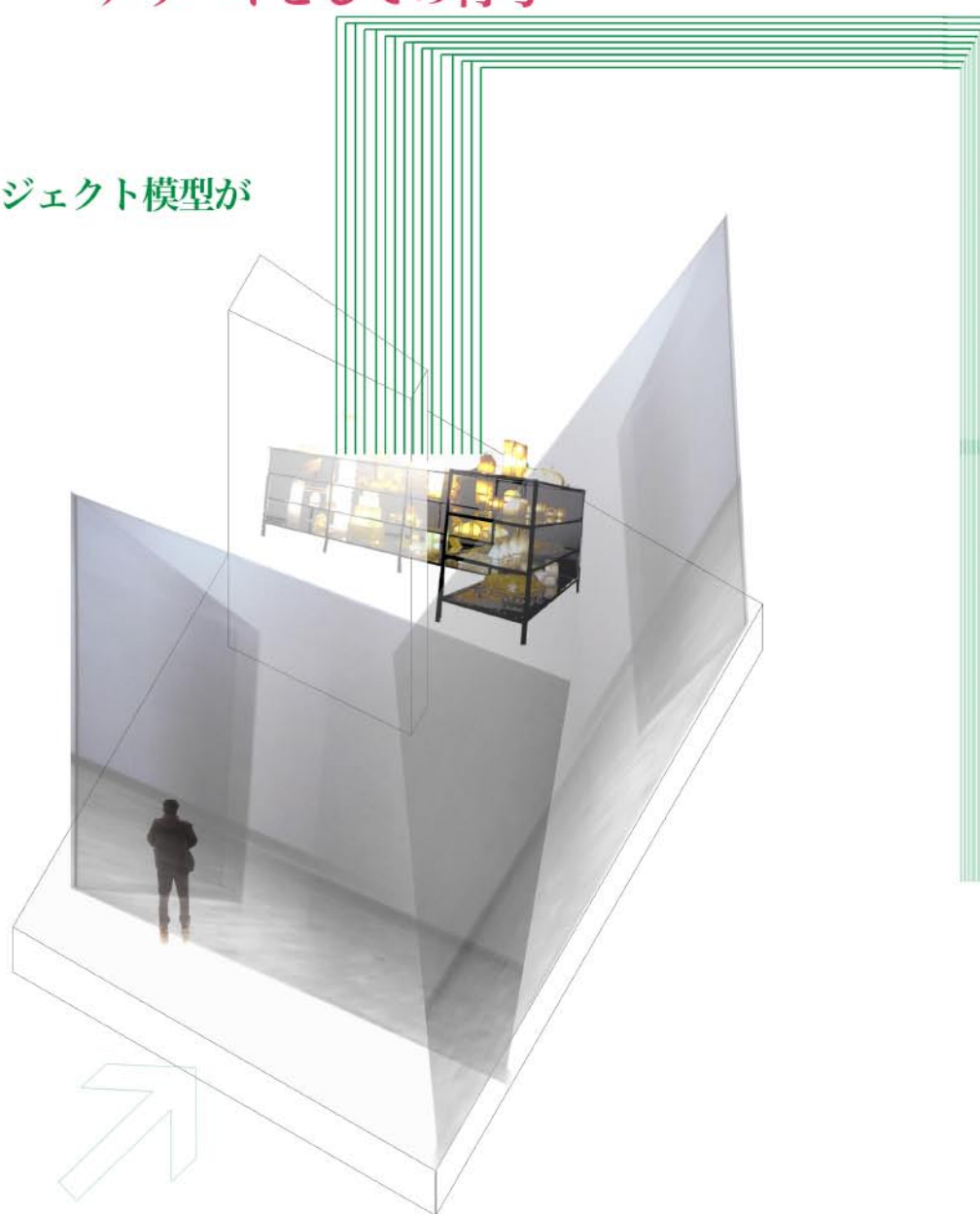
IV 1989(1995) ~ 2001(2011) NOWHERE ARCHITECT

冷戦構造（昭和）の終わり.9.11、3.11

場所からの流出、消去される自己像

レーゾンデーテルの隠滅 アリバイとしての符号

- ・無数の建築模型、建築プロジェクト模型が
並べられた巨大な棚で展示
+ 映像作品による展示



磯崎新 (鈴木忠志) 利賀村 1982-

坂茂 水琴窟の東屋 1989

藤森照信 神長官守矢史料館 1991

安藤忠雄 本福寺 水御堂 1991

大阪府立近つ飛鳥博物館 1994

灰塚アースワーク 1994-

坂茂 紙のログハウス-神戸 1995

atopic site 1996

伊東豊雄 せんだいメディアテーク 2001

磯崎新 海市計画 1997

SANAA 金沢21世紀美術館 2004

鈴木了二 物質試行47 金刀比羅宮プロジェクト 2004

石山修武 ひろしまハウス 2007

坂口恭平 ゼロ特区 2011~

コミッショナー（展示ディレクター）

岡崎乾二郎

1955 年生まれ。近畿大学国際人文科学研究所教授。1982 年パリ・ビエンナーレ招聘以来、インド国際トリエンナーレなど数多くの国際展に出品し、2002 年にはセゾン現代美術館にて大規模な個展を開催。また、同年「ヴェネツィア・ビエンナーレ第8回建築展」（日本館ディレクター）や、広島県北東部の江の川上流エリアにおける総合地域づくりプロジェクト「灰塚アースワーク・プロジェクト」の企画制作、「なかつくに公園」（広島県庄原市）などの設計、NY を拠点に活躍する現代舞踊家トリシャ・ブラウンとのコラボレーションなど、つねに先鋭的な芸術活動を展開している。東京都現代美術館（2009～2010 年）における特集展示では、1980 年代の立体作品から最新の絵画まで俯瞰した。主な著書に『ルネサンス 経験の条件』（筑摩書房）、『漢字と建築』（共著、INAX 出版）、『芸術の設計』（編著、フィルムアート社）、『絵画の準備を!』（松浦寿夫との対談、朝日出版社）、『芸術の設計』（編著、フィルムアート社）等がある。

展示内容コンセプト協力者（展示委員）

青井哲人

1970 年生まれ。『建築雑誌』（日本建築学会機関誌）編集長。1992 年京都大学工学部建築学科卒業。1995 年京都大学大学院工学研究科博士課程中退。神戸芸術工科大学助手を経て、現在明治大学理工学部建築学科准教授。日本建築学会、建築史学会、台湾建築史学会などに所属。主な著書に『植民地神社と帝国日本』（吉川弘文館 2005）『彰化一九〇六年 市区改正が都市を動かす』アセテート（2006）。主な受賞に、日本建築学会奨励賞（2002）、住宅総合研究財団研究選奨（2008）。

木幡和枝

1946 年生まれ。上智大学新聞学科卒業。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。舞踊資源研究所設立研究員。ニューヨーク P.S.1 現代美術センター（MoMA 提携機関）客員キュレーター。ダンス白州（旧称アートキャンプ白州）設立実行委員。主な制作・プロデュースに「春の祭典」（演出：田中泯、美術：リチャード・セラ、パリ・オペラ・コミック座、1990）、「永続する時間 一内なる光景、韓国、沖縄」（写真展、P.S.1 Contemporary Art Center, ニューヨーク、2004）、田中泯独舞公演「透体脱落」（東京、松本市、京都市 劇場、2007）。主な論文に『声と身体のある場所』（21 世紀文学の創造第 6 巻、岩波書店、2002）。主な翻訳に『良心の領界』（スーザン・ソントグ、NTT 出版、2004）。

鈴木了二

1944 年生まれ。建築家。早稲田大学大学院修了。70 年に fromnow を設立。83 年、鈴木了二建築計画事務所に改称。73 年より自身の作品を「物質試行」としてナンバリングし、建築はもとより、絵画、彫刻、インスタレーション、書籍、映像などの多領域にわたる「物質試行」は現在 53 を数える。作品は、建築に「佐木島プロジェクト」「金刀比羅宮プロジェクト」、映像に「空地、空洞、空隙」、「D UBHOUSE」、書籍に『建築零年』、『非建築的考察』（と

もに筑摩書房)、『鈴木了二作品集 1973-2007』(LIXIL 出版) などがある。

また映像作家として、七里圭との共同監督映像作品「DUBHOUSE」は、今年の第 42 回ロッテルダム国際映画祭短編部門に招待されている。

白井昱磨

1944 年生まれ。国際キリスト教大学人文科学科卒業後渡独。ベルリン自由大学及びベルリン造形大学建築科で学ぶ。1974 年より白井晟一研究所。1983 年より同研究所代表。虚白庵を場として建築設計に従事。主な作品に「雪花山房」「ユピテルビル」「等々力の家」。『白井晟一全集』等を編纂 主な論文に「イロニーの様式」。

田中正之

1963 年生まれ。西洋近現代美術史。武蔵野美術大学教授／美術館・図書館館長。国立西洋美術館主任研究員(1996-2007 年)を経て現職。展覧会として、00 年「ピカソ：子供の世界」、04 年「マティス」展、07 年「ムンク」展などを組織。主な論文に「マン・レイにおける女性の目の表現と『不気味なもの』」「『美学』第 50 巻第 3 号、「アリアドネー・ポーズとウォルプタス」『西洋美術研究』No.5、「ポストモダン時代の自己表象」『美術史論叢』第 27 号、「抽象写真家かシュルレアリストか——一九二〇年代後半から三〇年代におけるマン・レイの日本での紹介をめぐる」『美術フォーラム 21』第 23 号。

中谷礼仁

1965 年生まれ。「建築雑誌」元編集長。歴史工学。1987 年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1989 年同大学院修士課程修了。1989 ～ 92 年清水建設株式会社設計本部。1992 年～ 1995 年早稲田大学大学院後期博士課程。大阪市立大学工学部建築学科建築デザイン助教授を経て、2007 年早稲田大学建築学科准教授。他者の優れた成果をいち早く世に問う編集出版組織体アセテートを主宰。主な著書に『セヴェラルネス 事物連鎖と人間』(鹿島出版会, 2005) など。主な設計作品に『63』。

林道郎

1959 年生まれ。西洋美術史、美術批評。上智大学国際教養学部教授。主な著書=『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない』(全 7 冊、ART TRACE)、『ゲルハルト・リヒター』(共著、淡交社)、『シュルレアリスム美術を語るために』(共著、水声社) など。訳書=エミール・ディ・アントニオ+ミッチ・タックマン『現代美術は語る——ニューヨーク・1940-1970』(青土社) など。

松浦寿夫

1954 年生まれ。画家、西欧近代絵画史。東京外国語大学教授。主な著書=『講座 20 世紀の芸術 第 4 巻 技術と芸術』『講座 20 世紀の芸術 第 8 巻 現代芸術の焦点』(いずれも共著、岩波書店)、『朝日美術館 西洋編 9 ボナール』(共編著、朝日新聞社)、『モデルニテ 3×3』(共著、思潮社)、『村山知義とクルト・シュヴァイツァース』(共著、水声社)、『絵画の準備を!』(岡崎乾二郎との対談、朝日出版社) など。

展示制作協力者（研究所等）

| 運営・通訳翻訳 |

木幡和枝事務所

| 展示品考証調査及び模型制作 |

武蔵野美術大学 彫刻科研究室

武蔵野美術大学 美術館・図書館

早稻田大学 中谷礼仁建築史研究室

| 建築部材・復元制作 |

(株) LIXIL 技術研究本部常滑研究所 ものづくり工房

| 模型制作 · 資料提供 · 他 |

白井晟一研究所

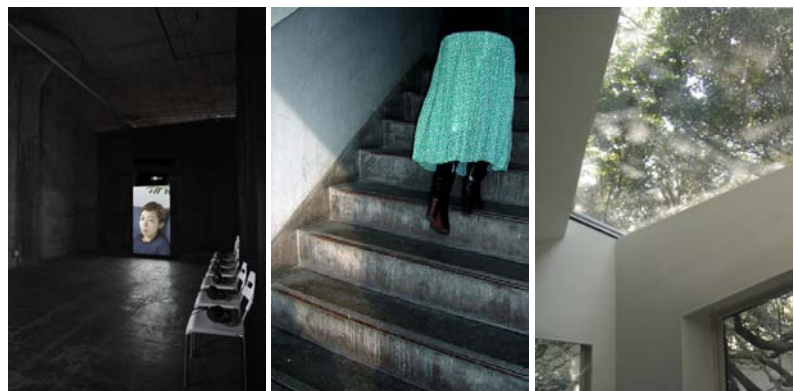
| 監修・編集・調査 |

近畿大学国際人文科学研究所 岡崎乾二郎研究室

映像作家

川村麻純

1975 年生まれ。2012 年、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。主な個展に「Shiseido art egg」(資生堂ギャラリー、東京、2013)、「Mirror Portraits」(LIXIL ギャラリー、東京、2012)、「I know you go」(ビジュアルアーツギャラリー、東京、2005)。主なグループ展に「東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士制作展」(BankART Studio NYK、神奈川、2012)、「ワンダーシード 2009」(トーキョーワンダーサイト渋谷、東京)、「Re:place」(Gallery 176、大阪、2008)、「New Visions of Japanese Photography」(Refind Nest Gallery、上海、2006)、「storyline」(セントラルイースト東京 2005)、「第27回キャノン新世紀」(東京都写真美術館、東京、2004)



鈴木了二

1944 年生まれ。建築家。早稲田大学大学院修了。70 年に fromnow を設立。83 年、鈴木了二建築計画事務所に改称。73 年より自身の作品を「物質試行」としてナンバリングし、建築はもとより、絵画、彫刻、インスタレーション、書籍、映像などの多領域にわたる「物質試行」は現在 53 を数える。作品は、建築に「佐木島プロジェクト」「金刀比羅宮プロジェクト」、映像に「空地、空洞、空隙」、「DUBHOUSE」、書籍に『建築零年』、『非建築的考察』（ともに筑摩書房）、『鈴木了二作品集 1973-2007』（LIXIL 出版）などがある。また映像作家、七里圭との共同監督映像作品「DUBHOUSE」は、

今年の第 42 回ロッテルダム国際映画祭短編部門に招待されている。



眞島竜男

1970 年生まれ。美術家。1990–93 年、Goldsmiths College, University of London 在学。1997–2000 年、スタジオ食堂参加。00–04 年、B ゼミ Learning System 専任講師。主な個展に「無題（栄光の彼方に）」（2012）、「北京日記」（2010、以上、TARO NASU）、「The Incredible Shrinking Pizza」（Hiromi Yoshii、2005）など。主なグループ展に「六本木クロッシング 2007: 未来への脈動」（森美術館、2007）、「食と現代美術 Part 2 美食同源」（BankART1929、2006）、「第 6 回シャルジャー・インターナショナル・ビエンナーレ」（アラブ首長国連邦、2003）など。2013 年 1 月より blanClass で連続レクチャー「どうして、そんなにも、ナショナルなのか？」を月 1 回行なう。



山本良浩

1981 年生まれ。映像作家。武蔵野美術大学映像学科卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。イメージ、音、文字、展示形式など、映像を「見る」という行為を異なる認識の多重体と捉え、短編映像作品とインスタレーションを制作。映像作品「Que voz feio（醜い声）」がイメージフォーラム・フェスティバル 2011 の「ジャパン・トゥモロー」（一般公募部門）にノミネート。同作品で 2011 年度第 15 回文化庁メディア芸術祭「アート部門」大賞を受賞した。





展示物＝参考 LIXIL 技術研究本部常滑研究所ものづくり工房で 製作中のテラコッタレリーフ部分



展示物＝参考 武蔵野美術大学彫刻科、美術館・図書館、協働で製作中の白井晟一建築模型基盤部（NOA ビル）



展示物＝参考 武蔵野美術大学彫刻科、美術館・図書館、協働で製作中の白井晟一建築模型基盤部（NOA ビル）

